

〔研究論文〕

日常生活世界から社会を知る方法 ——ドロシー・スミス「女性の立ち位置からの社会学」の着眼点——

上谷 香陽

〔Article〕

Knowing the Social from the Everyday World : A Consideration of Dorothy Smith's Sociology for Women

Kayo UETANI

Abstract

The purpose of this paper is to examine some key concepts of Dorothy Smith's feminist sociology through reading her early study, "Institutional Ethnography: A Feminist Research Strategy" (Smith 1987:151-179). In this article she re-raised the classical sociological issue about the relationship between people's local and particular experience and extra-local and general social relations, and suggested an alternative sociology that explores how the everyday world of people's experience is put together by social relations that extend beyond the everyday world. She argued that traditional sociological method of inquiry translates people's own knowledge of the world of their everyday practices into the objectified knowledge to make everyday world accountable within sociological discourse. On the other hand, her sociology locates the starting point of inquiry within people's actual experience and their own knowledge. The key concepts of her sociology, such as 'the everyday world as problematic' 'standpoint of women' 'institutional ethnography' 'work knowledge', make visible how people are connected into the extended social relations of ruling from people's standpoints. Through examining these concepts, this paper develops the method of sociological inquiry into knowing the social from people's actual everyday world.

1. はじめに

本稿は、カナダの社会学者ドロシー・スミス(Dorothy E. Smith)の社会学について考察する。スミスが自らの社会学の基本方針を示した初期の論文の一つ「制度のエスノグラフィー：一つのフェミニスト研究戦略(Institutional Ethnography: A Feminist Research Strategy (Smith 1987:151-179))」を読解しながら、「プロブレマティックとしての日常世界(the everyday world as problematic)」「女性の立ち位置(standpoint of women)」「制度のエスノグラフィー(institutional ethnography)」「ワーク・ノレッジ(work knowledge)」といった中心概念がどのように相互関連しているのかを検討していく。そのことをとおして、社会を知るとはどういうことかを問う、スミスの社会学の探究方法の着眼点を明確にしていく。

スミスの社会学の背景には、1960年代末以降の欧米近代社会の変容がある。1960年代末以降、

欧米近代社会では、それまであたりまえのこととして無自覚的にルーティンとして繰り返されてきた近代社会の生活様式の諸側面への疑問が顕在化し、人々が実際に日々の生活を生きながら内在的に別様の生き方を模索する社会運動が生起した。スミス自身が関わった北米カナダの女性解放運動は、その代表的例の一つである。

こうした動きを受け、社会学においても新たな探究方法の必要性が訴えられるようになる。新たな社会現象に対して、パーソンズに代表される既存の理論に基づいた探究方法の限界が指摘されるようになる。標準化された方法を用い、データや分析結果を数量化し、明確な因果関係のモデルによって説明することが「科学的」であるという考え方への疑問が提起され、そのようなやり方では捉えきれない日常生活世界、人々が実際に生きている状況や文脈、ローカル(local)な場面で生起する人々の行為や相互行為が注目されるようになる。さらには、「絶対の真理なるものが存在し、それを生み出すのが科学だ」という前提それ自体が問い直される。「科学的知識もまた、人間の手によって作られたものだ」「社会的現実、社会的なものを書くという社会学者の行為と切離せない」このような考え方のもと、社会学を含めた科学知識の社会的構築それ自体が社会学的探究の主題になっていくのである。

スミスは、1960年代末以降の欧米近代社会におけるこのような社会および社会学の変化に呼応して、自らの社会学を追究してきた。彼女の議論は、個人の経験とそれを超えた一般的な社会関係はいかにして関わり合うのか、という社会学の古典的な問いを、実際に日常生活世界を生きる人々の経験の場所から問い直そうとするものである。ここでは、日常生活世界はいかにして、その外に拡張し、その内部では発見できない社会過程の社会関係によって組織され決定されるのかと問われる。しかしそれは、専門社会学者の理論的な問いというよりは、実際に日常生活世界を生きながら自らの経験の成り立ちを知ろうとする人々が直面する問題として提起されている。20世紀後半以降の北米における近代社会の生活様式の変化をスミスが自ら経験する中で、改めて発見された問いである。

本稿ではスミスの論説を、個人の経験を成立させる(個人の経験に外在する)社会的なもののあり方を、実際にそれを経験する個別具体的な人々の立ち位置から知り直すこと、そのための社会学的方法や語彙を開発するものとして読解していく。スミスが「女性のための社会学(sociology for women)」に本格的に着手した1970年代、「社会的なもの」がどのようなあり方をしているかということについては、既に確立された専門的・学問的知識の集積が存在していた。これに対して彼女は、専門社会学による知識(「客観化された知識」)を出発点にして知ることができる「社会」ではなく、日常生活世界を実際に生きている人々が暗黙のうちに知っていること、行っていることを出発点にして知ることができる(社会)のあり方を解明する社会学的探究の方法を追究していくのである。

本稿で取り上げるスミスの上記の論文「制度のエスノグラフィー：一つのフェミニスト研究戦略(Smith 1987:151-179)」は、次の5節から成り立っている。1 社会学的探究の再構築(the reconstruction of sociological inquiry)、2 アクチュアルな局所的経験を一般化するものとしての制度的諸関係(institutional relations as generalizers of actual local experience)、3 イデオロギー・制度・エスノグラフィーの基盤としてのワーク概念(ideology, institutions, and the concept of work as ethnographic ground)、4 シングル・ペアレントの経験におけるイデオロギーとワーク：一つの制度のエスノグラフィーをスケッチする(ideology and work in the experience of a single parent : sketching an institutional ethnography)、5 私たちがいる場所から始め、権力の制度的組織化を発見する(beginning from where

we are and discovering the institutional organization of power)である。このうち、本稿では前半の1節と2節を中心に引き上げ考察する。

本稿ではこの各節をさらに3項に分割し、原文にはない小見出しを独自に追加した。以下では各項ごとに、まずスミスの論説の概要を紹介し、次にその読解をするという形で、スミスの社会学の探究方法について考察していく。

2. 社会学的探究の再構築

2-1. 「女性の立ち位置」からの社会学：問題の所在

カナダの女性運動に参加した経験をもとに、スミスは、1970年代から女性の立ち位置(standpoint of women or women's standpoint)⁽¹⁾からの社会学を発展させてきた。この社会学はそれまでの社会学的探究を再構築する試みであるとスミスは言う(Smith 1987:151-154)。

女性の立ち位置からの社会学とは、お馴染みの社会学的対象に対して従来とは異なるアプローチをとることを含意する。それまでの社会学という学問の中で定義され確立されてきた論点や問題を取り上げるのではなく、人々の日常の経験を組織する実際の社会過程と実践を、日常生活世界の立ち位置から探究することを目的としている。つまり、人々を対象(object)に転換せず、彼女らの主体(subject)としての存在を保存しようとするのである。また、社会学にとって知られている現象が、いかにして実際の個人の実際の行為を表しているか、という論点をめぐる社会学の考え方をまともに取り上げるのである。スミスの社会学は、これら社会学の現象が、いかにして社会関係として、つまり個人の経験の範囲を超えた社会関係の複合体として組織されるのかを探究するのである(Smith 1987:151)。

女性の立ち位置からの社会学は、これまでの社会学という言説の中のカテゴリーからは始めない。つまり、あらかじめ学問の中で定義し確立した理論的对象の特徴を発見しようという視点では、社会的世界のアクチュアリティ⁽²⁾にアプローチしないということである。女性の立ち位置からの社会学は、別のアプローチの方法を見つけようとするのだ。スミスが提案するのは、いかにして人々の毎日毎夜の活動が、より大きな社会的経済的過程の社会関係によって組織され、接続されるかを明らかにする社会学的探究である。いかにして自分たちの状況が、日常生活世界の範囲の外に拡張し、その日常生活世界の内部では発見できない社会過程の社会関係によって組織され決定されているのかを、実際に日常生活世界を生きている人々のために、明らかにしようとするのである(Smith 1987:152)。

【読解】ここでは、個人の経験と、それを超えた一般的な社会関係のかかわりあい方を再考するため、社会学的探究をどこから始めるのかが問われているのである。日常生活世界における個人の経験は、その外に拡張し、その内部では発見できない社会過程の社会関係によって組織され決定されているのだ。個人の経験を成立させる、この「社会的なもの(the social)」を知るやり方が問われている。ここでは、それまでの社会学という学問的言説の中で定義され確立した理論や論点や問題やカテゴリーなどの知識を基盤に探究を始めるやり方とは別のやり方がある、と示唆されているのだ。それは、人々の日常の経験を組織する実際の社会過程と実践を、実際に日常生活世界を生きている人々の立ち位置から探究するというやり方だと、述べられているのである。

2-2. 〈社会的なもの〉を知る二つのやり方——既存の社会学の方法と、女性の立ち位置からの社会的探究のやり方——

それまでの社会学は、ジェンダーという主題を隠してきた。社会学は、ほとんど男性の視点で考えられ、探究され、書かれてきたのである。1970年代以降、既存の社会学の多くの側面に対する批判が述べられてきた。批判の主な焦点は、それまでの社会学という言説の論点やレリバンスを作ることにより女性が不在であったために何が排除されてきたか、ということにあった。しかしながら、批判の二番目に主要な焦点は、既存の社会学の方法に疑問を投げかけてきたのである。その上で、女性の状況や経験を社会的探究の基盤にする研究の方法の影響に、関心を向けてきたのだ。スミスは、この二番目のテーマに関して、今日の先進資本主義社会を制御する(govern)制度的秩序の外側に状況づけられた経験(女性の経験が一般的にそうであったのだが)の立ち位置から生じる、認識論的・方法論的論点を扱ってきたのである。

それまでの社会学は、その特徴的なレリバンスと概念的組織化⁽³⁾を、ある装置の文脈の中で明らかにし、引き受けてきた。その装置は、多様な行政・経営・専門組織から成り立っており、テキストに媒介された言説の複合的な形式によって織り合わされているのだ(Smith 1987:152-3)。それまでの社会学は、今日の先進資本主義社会を制御する制度的秩序の内側に状況づけられてきたのである。

さらに、それまでの社会学の伝統的な方法は、社会過程を対象化(客観化)する際に、協働された社会的世界を生じさせることにおいてアクティブである主体の存在を、その表象から消去してきた。人々の現実の日常生活の諸関係は、社会的対象の特徴を表現する要因や変数の形式的な概念関係として表されてきたのだ。社会的対象それ自体が、社会学のテキストに埋め込まれた社会的言説の構築物として作り上げられてきたのである。この意味で、それまでの社会学の現象世界の多くは、今日の社会を組織し、調整し、規制し、誘導し、統制する制度的過程に基盤がある、と捉えられる。制度的過程は、支配するワーク(ruling work)⁽⁴⁾を遂行しているのだとスミスは言う。「精神病」「暴力」「少年犯罪」「失業」「貧困」「動機」など、社会学のお馴染みのことがらの多くを提供する諸現象は、この「支配する装置(ruling apparatus)」の、官僚的・法律的・専門的作用に不可欠な構成要素や生産物として出現するのである。

既存の社会学の諸現象は、その中で／それをとおして社会が支配されるところの諸関係の特徴として存在する。社会現象の対象化(客観化)された形式は、自然に存在する世界のアクチュアリティの表現ではなく、テキストに基づいた方法論と公の組織における実践の人工的な構築物である。それらはテキストという媒介をとおして共通に知られ、記録をつけるという組織のシステムの中で与えられた世界を構築する。知識のこれらの組織的・言説的形式は、特定の個人からは明確に独立している。それまでの社会学は、このようなやり方で出現し知られた世界をあてにし、作り上げ、拡張してきたのだとスミスは言う。

支配する装置や、そのテキスト的言説と組織化の過程から、女性は排除されてきた。女性は、支配する装置が機能する上で不可欠な労働や一般事務的な仕事を与えられ、せいぜい補助的な役割を果たすだけだった。秘書として、女性たちは、男性が生み出した思考やデザインを、コミュニケーションとして有効な物質的な形式に翻訳する仕事を行ってきた。妻として、女性たちは、支配する装置の中で行為し動く人である男性のために、身体的感情的支援を提供してきた。母親として、女性たちは、学校や教育システムにおける教育の仕事を補ってきた。このようにして女性たちが、制度的過程における男性の仕事に対する局所的な支援を供給してきたことは、北米においても20世紀後半まで不問に付されてきたのである。

これに対してスミスの、女性の立ち位置から始まる社会学は、支配する装置にとって必要であるがその装置によっては認識されないワークをしている人々と、支配する装置との関係を取り上げる。社会学の再構築の問題は、新しいトピックを導入したり、新たな尊敬を持って社会学の主体の経験に取り組む以上のことである。むしろ「私たちは、『私たちのための』知識、女性としての私たち自身の生活や経験の社会的決定を解明するはずの知識をいかにして創出するかという問題に直面している(Smith 1987:153)」と言うのである。

こうしたワーク過程を不可視にしてきた上での社会的知識の形式は、作り替えられなければならない。「ものごとはいかにしてそれらがそうであるようなやり方で私たちの前に立ち現れて来るのか、ということについての女性としての私たちの理解を拡張するためには、女性が主体として存在するところから始める方法が必要(Smith 1987:153)」なのである。スミスは「女性」なるものを、支配する装置の関係をあてにしその実践を組み込んだ社会学の知識の客観化された形式によって構築される想像上の空間にではなく、主体として、知る人として、彼女たちの実際の日常生活世界に位置づけられている存在として捉え直そうとするのである。

【読解】ここでは、社会的なものを知る二つのやり方が示唆されている。

一つは、それまでの社会学の、制度的秩序の内側から「社会」を知るやり方である。今日の(先進資本主義)社会を組織し、調整し、規制し、誘導し、統制するのは、多様な行政・経営・専門組織において生起する制度的過程である。この制度的過程は、テキスト——印刷されたものであれ電子的なものであれ、複製可能な物質として組織間を流通する公的な文書——に媒介された、客観化された言説的な形式の知識を不可欠な構成要素としている。個別的で具体的な個人々の経験は、この制度的過程に接続され、テキストに媒介された言説に関わり、一般的で抽象的な知識の形式で——社会的現象として——共通に知られることになる。特定の個人から独立しているものとしての社会的現象は、実際の日常生活世界の表象というよりは、行政・経営・専門組織がその弁別的な機能を果たすために作り出された言説的な構築物である⁽⁵⁾。それまでの社会学は、このようなやり方で出現し知られた世界をあてにし、作り上げ、拡張してきたのだと指摘されているのである。

スミスの提示するもう一つのものは、女性の立ち位置、すなわち、先進資本主義社会を制御する制度的秩序の外側に状況づけられてきた経験の立ち位置から知るやり方である。この「外側」は、「内側」と無関係に存在しているわけではないことが示唆される。女性の立ち位置とは、「支配する装置」にとって必要であるが、その装置の内側では認識されないワークを行っている人々の立ち位置である。社会学の探究の再構築とは、単に、これまで排除されてきた「女性の経験」を再評価し、社会学の新たな主題に据えることではないのだ。女性の立ち位置からの社会学とは、上記のようなワークを行っている人々の経験と「支配する装置」との関わり合いを問い直し、〈社会的なもの〉の別の知り方を開発しようとする社会学のことである。

「支配する装置」によっては認識されないワークをしている人々は、自らの日々のお決まりのルーティンとしてのワークを通して、自分たちの日常生活や経験や実践の状況を、その日常生活世界の内部では発見できない社会過程の社会関係によって組織し決定している。こうしたワーク過程はどのように成り立っているのかを、実際に日常生活世界を生きる人々の立ち位置において知ることはいかにして可能か。この〈社会的なもの〉を知るやり方、知識の創出が探究されているのである。

2-3. 人々を説明するためではなく、人々が社会を知るための社会学の方法

スミスの社会学は、知ることを客観化された形式——そこでは、状況づけられた主体や彼女の実

際の実験や場所は捨てられてしまう——に転換しない社会学を探究しようとする。このことは、女性の経験の世界や社会学者自身の主観性に関心を持つ社会学を勧めることではない。むしろここで探究されるのは、自分の経験の世界を組織する社会関係を把握するための手段を、当の経験の主体に与えることなのである。

女性の立ち位置からの社会学的探究を構造化する初期の問題設定は、日常生活世界への疑義(問い: *problematic*)である。プロブレマティック(疑問の余地のあるもの)としての日常世界(*everyday world as problematic*)という問い⁽⁶⁾は、現代社会における日常生活世界の社会的組織化の実際の特徴によって立てられるのだ。この特徴とは、日常生活世界の社会的組織化は、日常生活世界の範囲や個人の日々の活動の範囲の内部では部分的にしか見ることができない、という特徴である。この日常生活世界の局所的な組織化は、局所的生活と局所的場面を国家的・国際的な社会・経済・政治的過程に編み込んでいく非常に複雑な分業の社会関係によって決定されている。まさにここが、スミスの社会学的探究が入っていく場所なのである。

スミスが提案する社会学者の仕事(専門ワーク)とは、この日常生活世界の問いから組織される探究のワークだということだ。それは、その中で自分たちが行為し、苦勞している世界は、いかにして組み立てられているのだろうか、という問いである。一般に、直接の経験や、直接の経験をそのようなものとして生じさせる諸活動は、ある種の専門的探究によってのみその全貌を明らかにできる社会関係によって組織され、形成されている。「女性の立ち位置」からの社会学的探究も専門化された知識・技能を求めるが、スミスは、「自分の経験の社会的マトリクスを理解したいと思う人々と(スミスの)社会学者との共同作業として、この探究は見なされるべきだろう」と言う(*Smith 1987:154*)。というのも、日常の各人は日常生活世界の熟練した実践者であり、日常生活世界の構成の仕方やそのおきまりの日々の活動の達成に、ある意味、最も密接なやり方で精通している者であるからだ。女性の立ち位置からの社会学の探究の出発点を規定するのは、それまでの社会学という言説の中のカテゴリーではなく、自分の日常生活世界についての諸個人のワーク・ノレッジ(*work knowledge*)⁽⁷⁾であるからである。

もちろん、この探究の結果として産出されるものは、私的なものではない。社会学者は、私的な相談を受ける占い師ではない。むしろここで試みられるアプローチは、1960年代の北米の女性運動におけるコンシャスネス・レイジング⁽⁸⁾と同等のものを提供するのだとスミスは言う。「このアプローチは、個人的な抑圧体験と思われてきたことに客観的な相互関連を見出そうという一つのコンシャスネス・レイジングの形式と言えるかもしれない(*Smith 1987:154*)。」この探究は、コンシャスネス・レイジングのように、他者と共有されうるものである。その意味で主観ではなく、相互主観的なものである。女性の立ち位置からの社会学における制度分析の戦略は、抑圧経験の一般化された基礎を解明するものである。つまり、他者と共有した抑圧の特徴を、あるいは同じ関係のマトリクスに根ざした異なる抑圧の特徴を、その抑圧を経験する女性たち自身が発見できるような一つの様式を提示しようとするのである。

【読解】スミスの社会学では、直接経験する世界がいかにしてそれを越えた社会関係によって組織されているのかを把握する手段を、当の経験の主体に与える社会学的探究がめざされている。その際に、状況づけられた主体の実験の場所を放棄せず、知ることを客観化された形式に転換しないやり方が模索されるのだ。

直接経験する世界がどのように組織されているかは、実際に自分が経験している生活や活動の範囲の内部からは部分的にしか見ることができないという特徴がある。社会学的探究は、この日常生

活世界への問いから開始される。「その中で自分たちが行為し苦勞している世界は、いかにして組み立てられているのだろうか」という問いが出発点であり、自分の経験の社会的なマトリクスを理解したいと思う人々と、(スミスの)社会学者の共同作業として行われるという。

日常のおきまりのルーティンを遂行する中で、自分の生活や経験を外側から組織し、調整し、規制し、誘導し、統制する「支配する装置」の作動に無自覚的に参加し、自らを抑圧することが人々にはある。直接経験する世界の内部からは、この抑圧経験の組織化のされ方を十分に解明することができない。つまり自分の経験の成り立ちが不透明であるために苦しむという経験がある。この抑圧経験の社会的基盤を、日常生活世界における状況づけられた主体の実際の経験の場所から発見できるような探究方法が求められているのだ。

このような社会学的探究が依拠するのは、社会学という言説の中のカテゴリーではなく、日常生活世界についての諸個人の「ワーク・ノレッジ」である。各人は日常生活世界の熟練した実践者であり、日常生活世界の構成の仕方やそのおきまりの日々の活動の達成に最も密接なやり方で精通している。日常生活を実際に生きる人々は、自分の日常生活の成り立ちについての状況づけられた知識を習得しているのである。人々が無自覚的に使用しているこのワーク・ノレッジを、客観化された形式に転換せずに可視化するやり方が求められているのだ。日常生活世界における個人の経験は、その外に拡張し、その内部では見ることのできない社会過程によって組織され決定されている。個人の経験を成立させる〈社会的なもの〉を知るやり方を、人々のワーク・ノレッジに依拠して、解明していく社会学的探究が模索されているのである。

3. アクチュアルな局所的経験を一般化するものとしての制度的諸関係

3-1. 日常生活世界についての社会学的問題とは何か

「日常生活世界への問い(problematic)」という考え方で何を意味するのかを、スミスは以下のような例によって説明する。

朝、犬を散歩に連れて行った時、私は様々な「慣習」と呼びうるようなものを観察する。自分自身は歩道を歩く。隣人の芝地は歩かない。しかしながら、私の犬は、自由に芝地を駆け回る。私の犬はまた、私が気をつけていないと、隣人の芝地に糞をする。そしてこれを嫌う隣人も確かにいる。私はもちろんこの問題に気づいている。だから私は、犬が自分の用事を適切な場所で行うよう、手はずを整える。私は、よく手入れされた芝地を犬が避けるように特に気をつけて見ている。なぜならば、そういう芝地は、もし私が犬が滑って転んだら(そういうことは時々起こるのだが)最もトラブルになりそうだと知っている場所だからだ。私が住んでいる近隣は、一家族居住用(一戸建)の住宅(single-family residence)と貸家が混在している。そして芝地がよく手入れされているかいないかの差異は、このことに関係している。全体として、貸家に住んでいる人々は、家の前の芝生の見かけにそれほど注意を払わない。他方、自分自身の住宅を所有している人々は、家の前の草や、時には花壇にまで注意を払う。犬に注意しながら通りを歩いている時に、私は不動産の所有の異なる形式の細かな相違を観察している。私は、一家族居住用(一戸建)の住宅の所有権に関連して、犬の行動を特別の几帳面さを持って統制しようとしている。そして貸アパートや独身者の集合住宅などでは少しだけ、より無頓着になるのだ(Smith 1987:154-5)。

上記のような行動は、社会学においては規範という概念を使って慣習的に語られてきた。犬のためのスミスの行動の選択を、彼女と隣人に共通に持たれているある規範によって導かれたものとし

てみるのだ。「規範」という概念は、スミスの行動、彼女がするべきだとわかっていること——犬が他人の芝地で糞をしないようにいつも気を配り、より否定的な反応を被りそうなところで特別な注意を払うこと——の表面的特徴を提供してくれる。犬の散歩についてスミスが行ったような種類の記述は、規範についての言明に置き換えられる。しかしこうしたやり方は、大事な何かを逃しているとスミスは指摘するのである。

規範についての言明は、観察した行動を規定するものとして表象される。しかしここには、犬を散歩させるということの、進行中の構成的ワークの記述(account)というものが欠けている。この記述は、実践的推論の過程から生じるものだ。すなわち、局所的に実現される組織化として、いかにして犬の散歩に注意を払い、いかにして不動産の異なる形式をアクティブに構成しているかという過程だ。規範という分析は、この局所的な一連の行為がいかにして社会関係に接続されるかをとり逃してしまう。ここで言う社会関係とは、二人以上の個人(対面的に参加していなくても、お互いの参加を知らなくてもよい)が関わっている、協働された連鎖や一連の社会行為を意味する(Smith 1987:155)。

犬が散歩している場面には包含できないが、それにも関わらずこの場面に入り込み場面を組織する社会関係がある。一家族居住用(一戸建)の住宅や貸家の存在は、近隣の「不動産」の特徴を決定する様々なレベルの州の組織、地域の条例、地域区分の法律などと関係し、それに依存している。それはまた、家やアパートの不動産市場の組織、法律の専門家の仕事などと関係し、それに依存している。それはさらに、不動産の価値を維持する——それ自体として、あるいは近隣への敬意として——局所実践の中で個々の所有が表現されるやり方に関係し、それを組織している。疑いなく多様な形式で多様な場面で多くの人々によって演じられているだろう、犬の散歩というこのありふれた日々の場面には、各々の特定の局所的場면을より大きな一般化された社会関係の複合体に結びつける暗黙の組織化があるのだ。(Smith 1987:156)

【読解】犬を散歩させている時に、不動産の所有の異なる形式に応じて犬への注意の払い方を変える。このことを社会学では、例えば、「犬の散歩という行為は規範によって規定される」と記述される。しかしながら、こうした記述には犬を散歩させることの進行中の構成的ワークの記述が欠けている、とここでは指摘される。これは、この節の冒頭で示したような、犬を散歩させる実践的推論から生じる、局所的場面の個別具体的な構成過程の記述である。日々のルーティンとしての犬の散歩を、まさにそのようなやり方で成り立たせているワークの詳細な記述である。

犬を散歩させながら、スミスは、「一家族居住用(一戸建)の住宅」と「貸家」の違いを認識し、それにに応じて犬への注意の払い方を変えていた。近隣の不動産の異なる形式についてスミスが知っていることは、日々繰り返される犬の散歩というワークをとおして習得した状況づけられた知識である。しかし、「一家族居住用(一戸建)の住宅」や「貸家」というカテゴリーの存在自体は、犬の散歩を直接経験する世界の内部からは十分に解明することはできない。これらのカテゴリーは、犬を散歩させている当該場面に外在する、不動産に関する行政、経営、専門組織の作動を前提として初めて意味をなすものである。

「一家族居住用(一戸建)の住宅」や「貸家」というカテゴリーは、犬が散歩している場面には包含できないが、それにも関わらずこの場面に入り込み場面を組織する社会関係を示唆する。これらのカテゴリーの使用をとおして、犬の散歩というありふれた日々の場面は、各々の特定の局所的場面の個別性を超え、不動産をめぐる一般化された社会関係——二人以上の個人が関わっている協働された連鎖や一連の社会行為——の複合体に接続される。日常生活世界における個人の経験の個別具体

的な構成過程の詳細な記述には、個人の経験とそれを超えた一般的な社会関係の接合点——まさにここが、女性の立ち位置からの社会学の探究が開始される場所である——が埋め込まれているのである。

3-2. アクチュアルな局所的経験と、一般化する制度的関係は、いかにして接続するのか

直接的なものや局所的なものがそれを超える社会関係によって組織されていることは、犬の散歩に関する前述の記述の言葉の使い方においても表れている。そのカテゴリーは意味的組織化と同様、社会的組織化も表現している。日常生活世界の記述に組み込まれたものとしての日常生活の言葉は、それを超えた社会関係に根ざし、この言葉が記述する特定の場面に特徴的ではない諸関係を表現しているのだ。犬の散歩についての先の記述の中には、その意味することが、より大きな社会関係の複合体に根ざし、それを当てにしているカテゴリーがある。例えば、「一家族居住用(一戸建)の住宅」や「貸家」という言葉の意味は、局所的場면을組織する社会関係に属するが、局所的場面の中には完全には存在しない。個別的で詳細な記述は、個別的ではないもの——社会関係の複合体に達する意味を持つカテゴリーに埋め込まれている、という理由で個別的ではないもの——への接近を可能にする。ありふれた記述、ありふれたトークは、それらの言葉の意味の特性として、それらが現象と名づける拡張された社会関係を引きずっているのである。

それゆえ、日常生活世界を疑義のあるものとして取り上げることが、この探究が、一般化の可能性のない局所的場面の特定の記述というものに拘束されるわけではない(Smith 1987:157)。一般化の可能性の有無は、社会学的エスノグラフィー——人々の生きられた世界の説明としては興味をそそられるが、社会や社会関係についての一般的典型的言明としてはもちこたえられない(とみなされている)——にとっての問題とみなされてきた。社会学的エスノグラフィーそれ自体は、人々のこれこれのカテゴリーについて観察されたことの一般的・典型的レベルを確立するための、体系的な調査手続きを発展させるための、単なる途中駅のようにみなされてきたのだ。あるいは、このエスノグラフィーは、一般的社会学的原則の一例として読まれるかもしれない。

あるいは、この手続きが巧妙なやり方で逆転されることもある⁽⁹⁾。観察された局所的場面の社会的組織化から、一般化する概念を抽出する方法が提案される。局所的場面は、そこから抽出された一般原則の例になるのだ。この場合、一つの事例は、社会についての、ある母集団として方法的に表象された下位集団についての何らかの一般的言明を推定できない限り、または、局所的なものや個別的なものを社会学的言説の一般化する概念と結びつけない限り、意味を持たないのである。

日常生活世界から始めることで、スミスはこの論点を迂回する。局所的で個別的なものと、一般化された社会関係の関係は、概念的方法的な論点というよりは社会的組織化の特徴である。個別の「事例」は、探究者にとっての関心という側面においては、個別ではないのだ。実際、その存在自体では、探究者にとって「事例」でもない。むしろ、経験する諸主体の位置から、より大きな社会経済的過程に入る入り口である。日常生活世界の問題は、個別の経験と、大きな社会における分業を組織する一般化し抽象化された社会関係の形式の、まさに接合点で生じるのである。

【読解】個人の経験とそれを超えた一般的な社会関係の関わりあいを探究する際に——それまでの社会学という学問的言説における客観化された形式の概念やカテゴリーによる記述ではなく——日常生活世界の個別的で詳細な記述を入り口とすることができる。日常生活の言葉には、直接経験する世界を超えた社会関係に根ざし、この言葉が記述する特定の場面に特徴的ではない諸関係の表現がある。日々おきまりのルーティンを繰り返す中で人々が知っていることには、より大きな社会関

係の複合体をよりどころとしているカテゴリーがある。日常生活のありふれた記述やありふれたトークにおけるこうしたカテゴリーは、状況づけられた個人の経験の基盤としての「社会的なもの」を解明する出発点となる。

女性の立ち位置からの社会学にとって、日常生活世界の個別的で詳細な記述は、一般化の可能性のない局所的場面の特定の記述でも、一般的社会学的原則を構築するための途中駅としての「一事例」でもないのだ。個人の経験の成り立ちにおいて、局所的で個別的なものとは一般化された社会関係の関係は、二項対立的なものではない。日常生活世界の構成の仕方やそのおさまりの日々の活動の達成において、一般化する制度的関係は不可分な構成要素になっている。日常生活世界がまさに日常——つねひごろ、ふだん、平生、平常、ありふれた——として進行している最中に、そもそも自分の経験はいかにして成り立っているのかと立ち止まって問うことはない。自分の経験の成り立ちにおける、直接経験する生活や活動の範囲の内部からは解明できないことがらの存在は、通常は不問に付されているのである。

3-3. アクチュアルな局所的経験と一般化する制度的関係をつなぐカテゴリーや概念

人々が特定の形式で行っているアクチュアルなワーク——旋盤を使う、コンクリートを流すための木の枠を作る、組み立てラインで溶接をする、レストランで皿を洗う、コンピュータでタイピングする——が、その特定の特徴が視界から消えるような諸関係に入っていく一つの過程がある (Smith 1987:158)。

市場——そこには他者の無限の多様性が含まれているのだが——での交換のために物やサービスを生産することは、これらの局所的アクチュアリティから抽象された諸関係に人々を差し込む。この諸関係においては、商品やサービスの価値あるいは労働力それ自体の価値は、その特定の使用価値を取り除かれ、他の商品に対する交換における価値だけになる。同様に、具体的な労働の形式は、抽象的な労働や、ある商品を生産するのに社会的に必要な平均労働時間に分解される。商品という考えは、この二重の関係の社会的組織化——そこにおいて、売るために生産された物の具体的な使用と、交換価値が生じる市場という拡張された関係への参入が、結びつけられる——を示している。貨幣は、交換価値が表現される形式だ。したがって、貨幣は、資本主義社会においての「一般化するもの (generalizer)」である。マルクスが示すように、全く共通点のない物やサービスが、互いに評価され交換されうようになる。このように、資本主義の社会諸関係は、個別的で具体的なものを、抽象的で一般化された形式に転換する特別な特徴を持っているのである。

これら諸関係の特徴は、日常生活世界をあまねく組織している。工場などの仕事場面におけるワークや社会的組織化の記述を、そうした諸関係によって組織されたものとして見ることに何の問題もないだろう。ただし、この効果はもっと一般的に見られるものだ。たとえば、客がスーパーマーケットの仕事の組織化において果たす役割も含む。あるいは、昼食の最中に社会科学における認識論の問題を議論している時、かれらは食事を作ってくれるレストランの社会的組織化を自明視している。人々は、そうした社会的組織化の局所的参加者なのだ。食事をしている時にテーブルを独占すること、他の客に対する適切な行動、食事の構成など、これらは資本主義の拡張された商品関係の局所的に組織された構成物だ。このような局所的な社会的組織化の一般化された特徴は、局所的な社会的組織化が接続される (市場という) 一般化された社会関係によって決定されているのである。

局所的で具体的で個別的なものを一般的で抽象的な形式に変換する経済関係を補完するのは、

様々な側面における「支配する装置」それ自体だ。これらの装置は共通して、アクチュアルなものと抽象的な概念形式の結合点を持つ。この結合点は、特異なものの具体的なものの個別的なものを、カテゴリーに分解する。そのカテゴリーによって、支配する装置は、官僚的専門的経営の様式の内部で活動可能にされるのである。支配する装置の際立った特徴は、アクチュアルなものの局所的で無限に多様な特徴を、組織的行為の標準的形式に組織するこの能力だ。かつてスミスはこの点について、精神病の社会的構成の分析の中で以下のように記述した(Smith 1987:159)。

専門的官僚的手続きや用語は、抽象化されたシステムの一部だ。抽象化されたシステムは、個別や個人や特異や局所から独立しているふりをする。…実際の操作において…抽象的な形式は、アクチュアルで局所的な状況——抽象化された形式は、その中で機能しなければならないと同時に、それをコントロールもするのだが——に合わせられなければならない。実際は、抽象化されたシステムは、局所的で個別的なものと結びつかなければならない。精神医療の機関は、標準化されておらず、標準化された問題も存在せず、機関を行動可能にする用語において認識可能にされる形式にはまだなっていない状況と人々を、抽象化されたシステムに合わせる仕事のやり方を開発している。実際に起こったこと、人々が実際に行ったり経験したりしていること、人々がその中で働いている実際の状況、それらが機関に到達するやり方。それらのことがらはどれもきちんと形作られていない。無限に散らかっていて異なっていて不確定な実際の世界と、それらをコントロールし、それに働きかける官僚的専門的システムの間には、実践的な交流の過程がある。専門家は、こうした世界から秩序を作り出すよう訓練されている。彼はこの秩序を世界から発見したのだと信じているのだが。

別の制度的文脈では、局所的で個別的な形式は「散らかっている」のではなく、それを通して組織的な一連の行為に入っていくところのカテゴリーや概念を意味するようにされている。

日常生活世界を疑義として研究することには、日常生活経験の立ち位置からこれらの諸関係の特徴を調べることを通して、それ自体が一般化されている諸関係を探究することが含まれている。この試みは、諸関係それ自体をシステムとして記述するようなものになってはならない、とスミスは強調する。日常生活世界にいるアクチュアルな個人の立ち位置が、いつでも出発点なのである。

スミスは、子どもたちの学校教育(schooling)との関係における母親あるいはシングル・ペアレントとしての自身の経験をどのように探究したのかを例に挙げる。Alison GriffithやAnn ManicomやJoey Nobleたちとの探究や思考によって、スミスはこの経験を、それを組織する拡張された社会関係に埋め込むことができたという。この経験は自分自身のものだったが、それを対象としてではなく出発点として使い、それが位置づけられている諸関係を探究することで、この経験が一般化する諸関係によって組織されているやり方を示したのだ。Griffithが示すように、「シングル・ペアレント」という概念自体が、まさにそのような諸関係における「オペレーター(操作するもの)」になっていた。「シングル・ペアレント」としての自身の経験を探し出すことは、この経験を制度的過程の一般化され一般化する諸関係に入れることであった。「シングル・ペアレント」という概念は、家族を、「支配する装置」の専門化された機能に接続する諸関係の複合体の、構成要素になっていた。

これらの諸関係を実際の経験の立ち位置から考察することで目指されるのは——標準的な社会学的実践においてはしばしばそうであるのだが——「シングル・ペアレント」という分類のあいだの典型的特徴や多様性を同定することや、システムとしての制度的秩序それ自体を表象することではない。そうではなく、日常生活世界を決定している制度的関係を解明すること、つまり、日常生活世界が通常、知らぬ間に、一般化し一般化される諸関係において決定されていることを暴くために、いかにして日常生活世界の局所的組織化が探究されうるのかを解明することだ。これが、スミスの

言う、制度のエスノグラフィーの方法なのである。

スミスの社会学において、「制度的」「制度」という言葉は、「支配する装置」の一部を形成する諸関係の複合体——それは教育や医療や法などの弁別的な機能の周りに組織される——を同定するために使用される。官僚制のような概念に対して、「制度」は社会的組織化の確定的な形式を同定しない。むしろ、支配する装置の一つ以上の関係の様式の交差点や調整を同定する。州の機関は、その特性上専門的形式の組織と結びついている。どちらも一つ以上の秩序のある言説の関係によって相互に貫かれている。ここで「制度」とは、支配の装置の諸関係における分類するための結び目——行為の複数の脈絡を機能的複合体と調整する——として考えられる。調整の過程に不可欠なのは、局所的な一連の行為と制度的機能の関係を表現するカテゴリーや概念を提供するために、体系的に開発されたイデオロギーだ。このイデオロギーは、複合体の異なる専門化された部分と、多様な場を調整する共通の概念的組織化を交換可能にする、「通貨」を提供する。

エスノグラフィーという考え方は、そのような諸関係の複合体の探究や記述や分析——抽象的に考えるのではなく、日常生活世界のワークがそうした諸関係によって組織されている、ある特定の人物や人々という入り口から考えるような——に探究者を関わらせる。ここでエスノグラフィーとは——社会学では時々そうなのだが——観察やインタビューという方法に限るという意味ではない。むしろ、「それ」が実際にそうであるやり方や、「それ」が実際に働くやり方や、実際の実践や諸関係の探究と解明に関わることだ。妥当性についての問いは、「それは実際にそのようなやり方で働いたのか」「それは実際にそうなのか」といった、それらの過程それ自体の問い直しを含む。

制度のエスノグラフィーは、諸個人がかねらの実際の実践において／それをとおして生み出す社会関係を探究する。観察、インタビュー、ワークの経験を思い出すこと、アーカイブの使用、テキストの分析、何であれ、その方法は、実際の実践としての社会関係の探究の実用性(practicality)によって拘束されている。しかしながらこれは、日常生活世界の問題を探究する一つのやり方としての制度のエスノグラフィーが、社会学者による探究の代わりに、主体による分析、視点、ものの見方を用いるということを意味しない(Smith 1987:161)。確かに女性は彼女たちの日常生活世界の熟練した実践者である。しかし、問題としての日常生活世界という考え方は、人々の経験の脱局所的決定を暴くことは日常生活の実践の範囲には存在しない、と想定している。専門化された探究なしには多くを理解できない。そしてそのような探究は、社会学の特別な仕事なのである。

【読解】この節では、資本主義の社会諸関係における「一般化するもの(generalizer)」としての貨幣の作用が着目される。貨幣は、全く共通点のないものやサービスを、互いに評価され交換されうるものに転換する。旋盤を使う、コンクリートを流すための基の枠を作る、組み立てラインで溶接をする、レストランで皿を洗う、コンピュータでタイピングする、これら無限の多様性を含む個別具体的な仕事の場面は、貨幣を媒介に、「交換」のための物やサービスの生産として一般化され、市場という拡張された社会関係に参入する。スーパーマーケットに行き、買うものを選び、レジでお金を払うという、日々のありふれた買い物場面の局所的組織化においても、人々は無自覚的に自分の意図の一部ではない「交換」の複雑な諸関係に入っていく。

同様の作用を、官僚的・専門的・経営的組織の行為において使用されるカテゴリーに見出すことができる。日常生活世界における特異なものや具体的なもの個別的なものは、こうしたカテゴリーを媒介に、制度的過程において扱われる標準化された形式に転換され、組織的な一連の行為に入っていく。スミスは、1960年代～70年代の、子どもの schooling(学校教育)との関係における「シングル・ペアレント」としての自身の経験を、この観点から社会学する。「シングル・ペアレント」と

いうカテゴリーは、単に子どもたちを1人で育てているという事実を表象したものではなかった。このカテゴリーは、日々の個別具体的な家族生活を、学校教育という制度的過程の機能に接続する「オペレーター」になっていたのである。

スミスは、自分の子どもが学校での読みの学習に問題を抱えていたという文脈で、自分が「シングル・ペアレント」であることを認識させられたという。教室での子どもの問題は、学校教育の諸場面においては「シングル・ペアレント」という概念によって説明可能にされていた。教室での子どもの問題と家族形態が結びつけられていた。母親自身もまた、「シングル・ペアレント」であることの意味を「知って」いた。自分の家族には本質的な欠陥があると認識していたし、この欠陥について恐れや不安を抱いていた。自分が「シングル・ペアレント」であることを学校に伏せている母親もいたという⁽¹⁰⁾。

ここでスミスと同僚たちが行った探究は、「シングル・ペアレント」の事例研究をすることでも、システムとしての制度的秩序それ自体を研究することでもなかった。ここで問われたのは、そもそも自分の家族形態を欠陥と捉え恐れや不安を抱くという個人の経験は、いかなる制度的過程に接続されることによって組織されるのかである。

一人親の母親の子育て(マザリング *mothering*)が「欠陥」となるような学校教育は、いかにして成立しているのか。「シングル・ペアレント」というカテゴリーについて、当の母親たちは何を知ってしまっているのか。日々の個別具体的な家庭生活の場面を、「シングル・ペアレント」というカテゴリーでまとめあげ、一般化するイデオロギーはどのように作動しているのか。「シングル・ペアレント」が「欠陥」とみなされることの裏返しとして、学校教育(*schooling*)があてにしている「普通の」母親の子育て(*mothering*)とはいかなるものか。家庭での母親のワークが支えている、学校教育におけるワークや社会的行為の連鎖や協働はいかなるものか。これらが、「制度のエスノグラフィー」の問いなのである。

スミスは制度を、実体的な組織というよりは、客観化された知識を媒介に複数の人々の行為が連鎖し協働する諸関係の交差点や調整として捉える。この制度に不可欠な客観化された知識は、局所的な一連の行為と制度的機能の関係を表現するカテゴリーや概念それ自体のみならず、そうした「通貨」を提供するために専門的学問的言説において体系的に開発されたものの見方——イデオロギー——を含む。

人々の経験の局所的決定を暴くことは、日常生活の実践的推論の範囲には存在しない。ありふれたものとして流れていくのが日常生活世界の適切なあり方だからである。そもそも自分の経験がいかにして成り立っているのかという問いは、日常生活世界を実際に生きている時には発せられない。アクチュアルな局所的な経験とそれを一般化するものとしての制度的諸関係は、一見、断絶しているように見える。制度のエスノグラフィーは、個別的で詳細なワークの記述(エスノグラフィー)を入りに、日常生活世界の成り立ちから「社会的なもの」を発見し直そうとする試みである。

4 おわりに

以上、本稿ではスミスの論説を、個人の経験を成立させる(個人の経験に外在する)社会的なもののあり方を、実際にそれを経験する個別具体的な人々の立ち位置から知り直すこと、そのための社会学的方法や語彙を開発するものとして読解してきた。スミスは、専門社会学による知識(「客観化

された知識)を出発点にして知ることができる「社会」ではなく、日常生活世界を実際に生きている人々が暗黙のうちに知っていることを行っていることを出発点にして知ることができる〈社会〉のあり方を解明する社会学的探究の方法を追究している。

毎日毎夜のアクチュアルな生きられた経験世界に状況づけられた知人のための社会学を考案することは、標準的な社会学のやり方とは異なったやり方で進むことを意味する。それは、確立されたやり方を逆さまにすることだとスミスは言う(Smith 1999:45)。いかにしてあるいはなぜ人々はいかにがそうするように行為したのかを説明するというよりは、毎日／毎夜の世界のマトリクスに状況づけられた特定の経験から、その経験を組織し形成する様々な関係や力を探究し表示しようとするのである。

1980年代以降、北米ではスミスをはじめ多くの女性社会学者たちが、女性の経験に基づいた社会学——フェミニスト社会学——を開発してきた。これらフェミニスト社会学の探究は、女性たちが自分の人生で語らなければならないことを注意深く忠実に聞くことから始まる。しかし、彼女たちの語りが社会学のテキストとして記述される時、ある問題が生じる。それは、女性たちの経験(自分のであれ他者のであれ)を、テキスト的形式の言説——読む主体(書く主体)を彼女が探究を始めた経験の外に位置づける——に訳し戻さなければならないということだ。スミスのフェミニスト社会学はこの問題を主要な論点とすることから出発している。

スミスの女性の立ち位置からの社会学にとって、日常生活世界の個別的で詳細な記述は、一般化の可能性のない局所的場面の特定の記述でも、一般社会学の原則を構築するための「一事例」でもない。個人の経験の成り立ちにおいて、局所的で個別的なものと一般化された社会関係の関係は二項対立的なものではないのだ。スミスは、経験する諸主体の位置から、より大きな社会経済的過程に入る入り口を見出そうとする。日常生活世界が疑問の余地あるものとして立ち現れてくる時、アクチュアルな局所的経験と、それを一般化するものとしての制度的関係の接合点が浮き彫りになる可能性がある。

スミスは、ミクロとマクロ、局所と脱局所、主観(体)と客観(体)、個別と一般、具体と抽象などの社会学的言説における様々な二項対立的着眼点を、ある出来事を実際に経験する人々の立ち位置や、そうした立ち位置において知られていること(ワーク・ノレッジ)から再構成しようとする。その上で、ミクロ・局所的・主観的・個別的・具体的な経験は、いかにしてマクロ・脱局所的・客観的・一般的・抽象的なものに接続されるのかと問い直すのである。

1990年代以降の著作の中で、スミスの関心が、テキストを書くこと／読むことにおける、「社会的なもの(the social)」の社会的組織化の問題に焦点化されるのも、こうした文脈においてである。個別的で具体的な個々人の経験は、テキストに媒介された客観化された言説的な知識の形式に関わることによって、一般的で抽象的な制度的関係に接続される。この過程で何が起きているのかを、様々なやり方でそれに巻き込まれ、それに参加している人々の立ち位置から探究することが、スミスの「女性の立ち位置からの社会学」の次なる展開になるのである。

【注】

- (1) 女性の立ち位置(standpoint of women or women's standpoint) : スミスは、人々の日常の経験を組織する実際の社会過程と実践を、実際に日常生活世界を生きる人々の立ち位置から探究しようとする。女性の立ち位置とは、身体的に存在する局所的な個別性における、スミスの社会学の探究の出発点である。研究を開始する主体の位置を確立することで、社会科学的言説の知識の

客観化された主体を出発点とするやり方の代替案を示そうとするのである。この場所は実体的な「女性」に限らず、誰に対しても開かれているとスミスは言う (Smith 2005:228)。

- (2) **actuality** : スミスはこの語に中味を与えないのだと言う。なぜならば、この語には、その中で人々が生き、その中でテキストが読まれているところのテキストの外部を常に指示してほしいからだと言う。アクチュアル(actual)やアクチュアリティ(actuality)という概念は、探究されるべき世界——それは彼女あるいは彼が探究の仕事を行うところの世界と同じ世界——が既存の社会学的言説のテキストの外部にあることを指し示す。アクチュアリティは、常に、記述されうる、名づけられうる、分類されうるもの以上のものである (Smith 2005:223)。
- (3) スミスは **organization** という語を、実体としての組織という意味と、「組織されること」という意味で使用している。ここでは後者の意味で使用されている。本稿では、実体としての組織と区別するために、後者の意味の **organization** を組織化と訳す。
- (4) **ワーク** : スミスは **work** という語の意味を拡張して使用している。ワークという用語は、一般的には、人々が賃金を得て行うことを指してきた。**The Wages for Housework group** (「家事労働に賃金を」グループ) は、この概念を家事 (housework) だけでなく、時間や努力や意思を必要とする人々の行い全てを指すように拡大した。スミスの社会学はこの拡大されたワーク概念を、人々が何らかのやり方で制度的過程に参加している際に実際に行っていることを探究するために採用するのだと言う (Smith 2005:229)。この点については、Smith (2005:145-164) および、本稿で取り上げた Smith (1987:151-179) の3節、イデオロギー・制度・エスノグラフィーの基盤としてのワーク概念 (ideology, institutions, and the concept of work as ethnographic ground) (Smith 1987:161-167) に詳しい。後者については稿を改めて論じるつもりである。
- (5) Smith (1990a) (1990b) (1999) においては、日常生活世界で生起する出来事を制度的過程において記述可能 (accountable) にする手続きについての考察が主要なテーマになっている。
- (6) **everyday world as problematic** : スミスの社会学の探究の出発点となる問題設定。そもそも **everyday** とは「つねひごろ、ふだん、平生、平常、ありふれた」ものであるのが常態である。そこで行われていることにいちいち疑念を差し挟まないことによって、自らの日々のお決まりのルーティンをまさにお決まりのものとして遂行できるのである。この「ありふれた」ものであるはずの日常生活世界が、疑問の余地のあるもの、疑わしいもの、不確実なものとして立ち現れるところに、スミスの社会学の探究の入り口がある。日常生活世界が疑問の余地のあるものとして立ち現れ、お決まりのルーティンを遂行し難くなった時、人々は立ち止まり、いったい自分の日々の生活はどのような成り立ちをしているのかと問わざるをえなくなる。20世紀後半以降の北米における近代社会的生活様式の変化においては、専門社会学者の立ち位置というよりも、日常生活世界を実際に生きている人々の立ち位置からこうした問いが発せられたのである。
- (7) **work knowledge** : この語は、人々が自分のワークについて／ワークの中で知っていることや、人々のワークが他者のそれと協働 (coordinate) するやり方を指す。ワーク・ノレッジは、スミスの言う制度のエスノグラファーにとって主要な資源である。情報提供者自身の経験や、観察者が所与の場面で人々の活動を経験／観察したことに基づいている場合は、この知識はインタビュアーと情報提供者のやり取り (interchange) によって対話的に呼び起こされる (Smith 2005:229)。
- (8) **コンシャスネス・レイジング** : consciousness raising. 意識改革、意識向上、意識高揚運動、CR。

1960年代の女性解放運動の中で始まった運動形態。女性たちが各地で小さな草の根のグループを作り、自分たちの問題を議論し、個人的な経験を分かち合い、それぞれの経験が共通の「抑圧」という一般的な構造につながっていることを理解した。「個人的なことは政治的である」という、1960年代の女性解放運動の中心的な考え方を生み出した。

- (9) スミスはここで、ストラウスらのグラウンデッド・セオリーを念頭に置いている。
- (10) 本稿で取り上げた Smith (1987:151-179) の4節シングル・ペアレントの経験におけるイデオロギーとワーク：一つの制度のエスノグラフィーのスケッチ (ideology and work in the experience of a single parent : sketching an institutional ethnography) を参照。この節については稿を改めて論じるつもりである。

文献

ソニア・アンダマール他＝奥田暁子 監訳『現代フェミニズム思想辞典』明石書店。

マギー・ハム＝木本喜美子 他監訳(1999)『フェミニズム理論辞典』明石書店。

Dorothy E. Smith (1987) *The Everyday World as Problematic : A Feminist Sociology*. University of Toronto Press.

— — — (1990a) *The Conceptual Practices of Power : A Feminist Sociology of Knowledge*, Northeastern University Press.

— — — (1990b) *Text, Facts, and Femininity : Exploring the Relations of Ruling*, Routledge.

— — — (1999) *Writing the Social : Critique, Theory and Investigations*. University of Toronto Press.

— — — (2005) *Institutional Ethnography : A Sociology for People*. Altamira Press.

リサ・タトル＝渡辺和子 監訳(1991)『フェミニズム事典』明石書店。

ウヴェ・フリック＝小田博志 他訳(2002)『質的研究入門——〈人間の科学〉——のための方法論』春秋社。